

極々わずかな異なる色彩。

気付くためには、それだけあれば十分だった。

しかし彼女——アテナ・グロリーイは気付いたことなどおくびにも出さず、舟（ゴンドラ）を漕ぎ続けた。その間に左右をささむ建物を確認するが、そちらには異常を認められない。

敵はスナイパーのみ。——いや、もう一人。しかしこちらは銃を構えていないようだ。スポッターだろう。それが少々意外だった。これは、このような布陣は、マフィアの戦い方ではない。さらに、この街での戦闘に関してははずぶの素人だ。

もちろん、二割方冗談ではあつたのだが、確かにクリムゾン・ローズのファミリーの仕業ではないようだ。

——背後のアパートメントの屋上を映し出す水面を見ながら、彼女は目まぐるしい速度で情報をかき集める。

次第に左への曲がり角が迫る。正面に位置する窓ガラスが、より精細な背後の面を映し出していった。

確信する。敵はスナイパーとスポッターの二人組みだ。問題は、いつ彼らが引き金を引くのか。まず間違いなく、彼らの狙いは自分だろう。

さあ、どうする。スナイパーであれば、その狙撃の瞬間を読むこともできるだろう。しかし、『冥界の謳声（セイレーン）』とあだ名される彼女は違う。

銃の手持ちもあるが、この距離では役に立たない。ならば——

彼女はゆっくり振り向いた。

銃口へ、まっすぐ視線を合わせる。

案の定、短い動揺の後にマズルフラッシュが輝いた。

発砲を誘った。成功だ。

瞬間ガチッと、と空気を裂くような金属音が目の前で炸裂した。先読みで振り上げたオールが、飛来した弾丸を叩き落したのだ。

鋼鉄製の鈍重なオールが削れ、無理やり軌道を変えられた弾丸が水

面を突き破って失速する。

スナイパーの動きが止まった。それもそうだろう。

誰が、彼女が手に取るオールが金属製だなどと思うだろうか。誰が、細い彼女の身体にそんなものを振り回す力があると思うだろうか。

誰が、ライフル弾を叩き落とす人間がいるなどと思うだろうか。

そしてその隙が、彼らに致命的な打撃を叩き込む。

褐色の肌の下、普段は眠っている筋肉が活性化し、しなり、強靱な力で縮み、鋼鉄のオールを撃ち放った。

オールが回転しながら空を裂く。スナイパーたちがその非常識を認識するよりも早く、その頭骨は二人同時に砕かれていた。

脳漿を撒き散らしながら二人の男が屋根の向こうへ崩れ落ちる。彼女の場合、やはりこの距離だと銃よりも投擲の方が命中率は高いようだ。

オールが屋根の向こうで横滑りし、瓦の上を滑落していく音が響く。

さて、オールの回収はファミリーの者に任せるとして。問題は、目の前に迫る曲がり角をどうやって曲がろうか。

6

それは窓の破られる音から始まった。

鋭くけたたましいガラスの破砕音に、窓枠が折れる湿った音が混ざる。

その音の向こうから現れたのは、タクティカルベストに身をつつんだ男たち。その手には分厚い軍用ナイフ。

一方、小道に面した建物を見れば、減音器（サブレッツサー）を付けた四つの銃口。

「あらあら」